
言語研究の観点から見た東北アジア ― 岡報告へのコメント

“Northeast Asia” from the Point of View of Linguistic Studies: A Comments to Oka's Report

栗林 均
KURIBAYASHI Hitoshi

私の専門は、モンゴル語を対象とした言語研究で、学問分野としては言語学・文献学・音声学の領域に属している。岡報告では、「モンゴル」を規定する様々な観点から提示されたわけであるが、ここでは岡報告に加えて「言語」の見地からの観点を提示してみたいと思う。

1. 言語的な観点から見た「モンゴル」

「モンゴル語」というと、地理的にロシアと中国に挟まれたモンゴル国の言葉として思い浮かべる人が多いだろう。たしかにモンゴル国の公用語はモンゴル語であり、現在約260万人いる同国の国民のほとんどがモンゴル語を母語として生活しているので、そこは確かにモンゴル語の世界だということができる。

しかし、「モンゴル語」が使用されているのは実はモンゴル国だけではない。モンゴル国と国境を接している中国の内モン自治区には、モンゴル国の人口を上回る400万人以上のモンゴル族が居住しており、そこで使用されている言語も「モンゴル語」である。さらに、中国の新疆ウイグル自治区の西部でモンゴル国とロシアの国境に近い地域に10数万人のモンゴル族が居住している。これらの人たちは、いずれも自分たちを「モンゴル」であると言い、自分たちの用いる言語を「モンゴル語」と呼んでいる。

このように、「モンゴル語」という場合、モンゴル国と中国の内モン自治区、新疆ウイグル自治区のモンゴル族によって使用されている言語を指しているが、モンゴル国と中国の内モン自治区、新疆ウイグル自治区で用いられている言葉は全く同じというわけではない。書き言葉ひとつを取ってみてもモンゴル国ではロシア文字でモンゴル語を表記しているのに対して、中国の内モン自治区では伝統的な縦書きのモンゴル文字を使用し、さらに新疆ウイグル自治区のモンゴル族はモンゴル文字を改良したトド文字という文字を使用している。話し言葉にしても、モンゴル国ではハルハ方言を標準語としてそれがほぼ行き渡っているのに対して、中国内のモンゴル語は内部の方

言の差異が大きく、内蒙古自治区のチャハル方言を標準の発音としてはいるものの標準語として普及しているとは言い難く、各地の方言がそのまま幅を利かせているといった状況である。さらに、語彙や表現も、歴史的な経緯から、モンゴル国ではロシア語に範を取った表現や借用語を多く取り入れているのに対し、中国内では中国語に合わせた翻訳的な表現や借用語が多く使われている。このように相互間の相違やそれぞれの内部における差異は存在しているものの、言葉としては相互に理解が可能であり、またお互いが同じ言葉を使用しているという意識を共有している。同時に、そこには共通の文化と伝統が共有されているということもできる。言語の研究を行う立場からすれば、その言語の話者集団がいる所がすなわち研究の「地域」を形成することになる。

2. モンゴル語族

「モンゴル語」と並んで、「モンゴル語族」というとらえ方がある。「語族」というのは、同一の起源から発したいくつかの言語をまとめて呼ぶ用語である。歴史的な観点からみれば、もともとは上に述べた「モンゴル語」と同じ言葉だったものが、時間の流れの中で独自の変化を被りながら現在に至るまで使用されてきている諸言語を（「モンゴル語」も含めて）「モンゴル語族」と呼んでいる。

ロシア連邦内では、バイカル湖の東部と南部の沿岸に位置するブリヤート共和国のブリヤート語、およびモンゴル高原のはるか西のカスピ海に注ぐボルガ川の西岸にあるカルムイク共和国のカルムイク語がモンゴル語族に属している。ブリヤート語の話者数は約30万人、カルムイク語の話者数は約14万人で、いずれも書き言葉はロシア文字で表記している。ブリヤート語もカルムイク語も、現在ではそれぞれ独立の言語として扱われているが、もともとはモンゴル語と同じ起源から発したものが、音声や文法・語彙の面でそれぞれ独自の変化を被って現在の形となったものである。

「モンゴル語族」に属するのは上の3言語だけではない。1950年代に梅棹忠夫氏らが調査を行ったアフガニスタンの「モゴール語」もこれに含まれる。モゴール族はモンゴル帝国の時代にこの地に侵攻して来て駐屯したモンゴル族の後裔であろうと言われている。民族的な由来はともかく、言語としてモゴール語はモンゴル語族のひとつであることは疑いない。モゴール語については、1970年代にドイツの調査隊がヘラート州で言語調査を行い、数百人の共同体がいたことを報告しているが、その後、ソ連のアフガニスタン侵攻、内戦、最近のアメリカの対テロリスト攻撃などにより、彼ら

の消息は見当もつかないのが現状である。

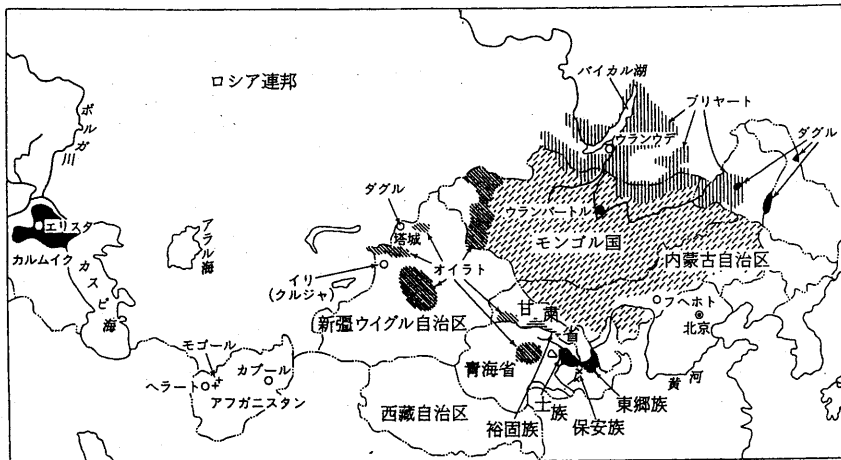
中国では、甘粛省と青海省に居住する少数民族の東郷(ドゥンジャン)族、保安(バオアン)族、東部裕固(シラ・ユグル)族、土(トゥー)族の話す言語がモンゴル語族に属している。また内蒙古自治区の興安嶺の地域に居住する達斡爾(ダグル)族の言語もモンゴル語族のひとつである。

表1は、モンゴル語族に属するこれら9個の言語について、それらの主な居住地と話者数の概数をまとめたものである。図1では、それらの地理的な分布を地図の上に示した。

表1 モンゴル語族

言語名	主な居住地	話者数(既数)／万人
モンゴル語	モンゴル国 中国内蒙古自治区等	250万人 500万人
ブリヤート語	ロシア連邦ブリヤート共和国	30万人
カルムイク語	ロシア連邦カルムイク共和国	14万人
ダグル(達斡爾)語	中国内蒙古自治区	8万人
ドゥンジャン(東郷)語	中国甘粛省	20数万人
モンゴオル(土族)語	中国青海省	10数万人
バオアン(保安)語	中国甘粛省・青海省	1万人
シラ・ユグル(東部裕固)語	中国甘粛省	3千人
モゴール語	アフガニスタン	数百人

図1 モンゴル諸族の分布



モンゴル語およびモンゴル語族を対象とした研究としては、これら諸言語の音声や文法、語彙等の個別的な記述研究に加えて、これらの言語がどのような変化を被ってきたかという歴史研究、さらにこれらの言語を互いに比較して分裂以前の言語の状態を推定し、それぞれの言語が形成されるに至った経過を研究する比較研究といった領域がありうる。したがって、これらの言語が行われている地域——北はバイカル湖から南は中国青海省の黄河流域まで、東は興安嶺から西はボルガ川沿岸まで——が、研究のフィールドになる。

3. アルタイ学説

ここまではモンゴル語族というグループの内部をみてきたが、ここではグループの外に目を向けて、モンゴル語族と他の言語との関係について考えてみたい。モンゴル族は14世紀のモンゴル帝国の建国以前から、現代に至るまで歴史的に多くの民族と交流を持ち、言語的にも少なからぬ影響を及ぼしあってきた。現在、外部の言語的な影響が顕著に見て取れるのは、中国とロシアの領土内に居住するモンゴル語族の言語であり、それぞれの国家の政治・経済・社会・文化すべての生活の方面に関連して中国では中国語の、ロシアではロシア語の表現に合わせた語彙や表現が浸透している。このほか17世紀以来、チベット仏教の伝播を通して、モンゴル語がチベット語から大きな影響を被ったことはよく知られている。

モンゴル語族は、さらにチュルク語族、ツングース語族とともに共通の起源にさかのぼるといえる考え方がある。これは、これらの言語が起源的に関係しているという見方で、モンゴル高原西部のアルタイ山脈の名を取ってこれらを「アルタイ語族」と名付けた。「アルタイ語族」という呼び名は、一般によく知られているが、これは現在の段階では証明されておらず、あくまでも「仮説」の域にとどまるものであることは強調しておく必要がある。正確を期すために、「アルタイ学説」あるいは「アルタイ仮説」というような呼び方が行われることもある。

これに関連して、「チュルク語族」と「ツングース語族」について簡単に説明しておこう。

チュルク語族に属する言語としては、トルコ共和国のトルコ語、中央アジアのカザフ語、ウズベク語、トルクメン語、キルギス語、シベリアのレナ川沿岸のサハ共和国に行われるサハ語（ヤクート語）、中国新疆ウイグル自治区のウイグル語、中国甘粛省・青海省のサリク・ユグル語、サラル語等々、20数言語に及ぶ。話し手の分布地域

は中国の新疆ウイグル自治区から地中海沿岸のトルコ共和国に至るまでの中央アジア一帯を含む広大な地域で、話者数の合計はモンゴル語族より桁がひとつ上がって約4～5千万人と言われている。

もう一方のツングース語族は、シベリアのエニセイ川以東から中国東北地区に分布する少数民族の言語でエウエンキ語、エウエン語、ソロン語、ネギダル語、ウデヘ語、オロチ語、ナナイ語、オルチャ語、ウイルタ語、満洲語等々、10余言語が含まれる。満洲語は中国の清王朝を作った満洲族の言語である。これらの言語の話し手の数は合計で10万人前後である。

モンゴル語族、チュルク語族、ツングース語族のひとつひとつを取って見た場合、それぞれが「語族」として共通の起源に発するという事は、すでに証明されている。それぞれの語族の内部の言語同士を比較してみた場合、基本的な単語や文法的な要素の意味と音（語形）が同じだったり、似通っていたりするものが多数に及び、「元々同じものがそれぞれ変化した」と考える以外に説明のしようがないのである。それらが共通の起源にさかのぼることは、多くの場合、証明を必要としないほど自明のことと言える。

モンゴル語族、チュルク語族、ツングース語族という3つの語族について、語族同士を比較した場合、言語的な特徴として互いに多くの共通点があることが指摘されている。そのいくつかを列挙してみると次のようになる。

- ・語順がほとんど同じである。修飾語は被修飾語の前に立ち、目的語が動詞の前に立つ。
- ・疑問文は肯定文の終わりに疑問を表す助詞をつけて作る。
- ・前置詞の代わりに後置詞を用いる。
- ・動詞の変化が、語幹に語尾をつけることによって行われる。
- ・語頭に子音が二つ来ない。
- ・r音で始まる語がない。
- ・母音調和がある。
- ・冠詞、文法的な性が無い。

上に述べた特徴は、1908年（明治41年）に藤岡勝二氏が「日本語の地位」という講演記録（『國學院雑誌』14巻）の中で指摘しているものの一部である。藤岡氏は、これらの特徴はモンゴル語族、チュルク語族、ツングース語族に共通しているだけでなく、ハンガリー語、フィンランド語、エストニア語等を含む「ウラル語族」にも共通であり、さらにそのほとんどが日本語にも当てはまることから、日本語と「ウラル・

アルタイ語族」との共通の起源を仮定するべきだとして、世の注目を集めた。「ウラル語族」は、ウラル山脈にならった名称であるが、上に述べたハンガリー語、フィンランド語、エストニア語等が共通の起源にさかのぼることはすでに証明されている。

20世紀にはモンゴル語族、チュルク語族、ツングース語族が共通の起源にさかのぼり「アルタイ語族」を形成する、ということを証明しようとする研究が盛んに行われ、さらにそれらに朝鮮語と日本語を含めて共通の起源という可能性を求める研究が行われた。しかし、この方面での研究の結果を総括すれば、「アルタイ語族」は依然として仮説のままに止まっていると言わざるをえない。モンゴル語族、チュルク語族、ツングース語族の3つの語族をとってみると、上のような共通の言語的特徴が存在しているだけではなく、単語の類似も少なくない。チュルク語族とモンゴル語族を取り上げてみると、意味と形（音形）の類似している単語は数百の単位にのぼることが指摘されている。また、モンゴル語族とツングース語族の間にも意味と形が同じだったり類似している単語を列挙すると数百に及んでいる（これに対してチュルク語族とツングース語族の間には、このような類似の単語はそれほど多くない。）

しかし、これらの語族の間で「類似している単語」の質に注目する必要がある。先に、それぞれの語族を構成する言語間で「類似している」としたのは、「基本的な単語」や「文法的な要素」に関してであった。「基本的な単語」というのは、数詞や基本動詞、親族語彙、あるいは日常生活に関係の深い語彙、さらに前置詞や後置詞などの文法的な語彙を指している。「文法的な要素」というのは、名詞に付く複数語尾や格語尾、動詞に付く活用語尾を指している。チュルク語族とモンゴル語族、またモンゴル語族とツングース語族の間に数百にのぼる類似している単語が存在しているにもかかわらず、そうした類似は上に述べた「基本的な単語」に関しては往々にしてすっぽりと抜けているのである。たとえば、数詞をとってみると、3つの語族の間で類似しているものはほとんど見当たらない。代名詞や格語尾の中には意味と形の類似したものがいくつか見いだされることがあるが、他の部分に類似は見いだせない。基本的な単語と文法的な要素の大部分に意味と音形との類似が見いだせない限り、2つの言語が共通の起源に由来するということとはできない。20世紀の研究の結果が、「仮説のままに止まっている」というのはこういうことなのである。「モンゴル語はアルタイ語族のひとつで…」といった文章を目にすることがあるが、「アルタイ語族」という証明されていない仮説を無批判に受け入れている立場には、警戒を要すると言わねばならない。

いささか悲観的ではあるが、1世紀にわたって世界の傑出した研究者が精魂を傾け

で行った研究の結果がこうした状況であるということは、これから先「アルタイ仮説」が証明される可能性は少ないと見るのが現実的な立場であろう。

4. 新たな「アルタイ学」に向けて

オプチミスティックに「アルタイ仮説」の証明に期待をかけるとすれば、それはチュルク、モンゴル、ツングース、さらには朝鮮、日本を含むまとまりとして、まさにこのシンポジウムで問題としている「東北アジア」におあつらえ向きの「地域」を想定することができる。しかし、残念ながら、上に述べたように言語の共通の起源の研究（比較言語学）の見地からすれば「アルタイ仮説」の証明に大きな期待を寄せることは難しいと言わざるを得ない。

そこで、ここでは「言語の共通の起源」という視点を一義的な目標とせず、新たに言語学的な見地から「アルタイ学」を推進していく可能性を提案したい。チュルク語族とモンゴル語族、またモンゴル語族とツングース語族の間には、意味と音形の類似した単語がそれぞれ数百におよぶことを先に述べたが、この事実はお互いの言語共同体が極めて密接に接触して文化の交流が行われたことを示している。これらの大部分は、そうした接触の中でひとつの言語から他の言語に借用語として取り入れられたものと考えられる。（チュルク語族とツングース語族に共通の単語が少ないのも、両言語の接触の度合いを反映したものであると考えることで納得がいく。）こうした共通の単語は、いちどきに取り入れられたものではなく、様々な時代に行われた、幾層にもわたるものであることは想像に難くない。これらの語族同士の間で、どの時代にどのような交流が行われ、言語とそれに伴う文化の接触が行われたのか、こうした言語的な手掛かりによって究明していくことは興味深いテーマとなりうる。さらに、藤岡勝二氏が指摘したような語順や音声構造等の特徴の共通性は、同一の起源を証明する直接の手掛かりとはなり得ないにしても、朝鮮語や日本語も含めて、言語の類型を論じる上で重要なファクターとみなすことができる。

「アルタイ語族」というのは共通の起源を前提にしたタームであるが、共通の起源を前提とせず、チュルク語族、モンゴル語族、ツングース語族をまとめて「アルタイ諸語」と呼び、言語・文化の交流および言語類型論の見地から「アルタイ」をフィールドとすることによって新たに「アルタイ学」を構築することをここに提案したい。

言語研究の立場から、「東北アジア地域」を規定する可能性を提示することで本稿を閉じよう。